子宮頸がん検査のオプション検査・HPV-DNA検査について

頸がんの原因HPVとは？・・・誰でもかかるありふれたウィルス

HPV(ヒトパピローマウィルス;Human Papilloma virus)は、現在まででに、100以上の種類が見つかっています。主に性交渉により感染し、女性の70-80%は生涯のどこかでHPVに感染しているという、極ありふれたウィルスです。その感染の実に9割は自然に排除され治癒しますが、抗原性が弱く、免疫を獲得できないので、治癒してもその後再感染を繰り返します。持続感染となった場合、子宮頸部の細胞異形成を発生させ、そのなかの非常にわずかな例で子宮頸がんを引き起こすことが分かってきました。

このなかでハイリスクタイプ（高危険型：16・18・33・52・58型、他全部で15タイプ）といわれるHPVのグループは、ほとんどの子宮頸がんの組織中に検出され、これが子宮頸部異形性を起こし、子宮頸がんへと増悪してゆくことが分かってきました。

子宮頸がんは予防できる癌です

子宮頸がんは、定期的な子宮がん検診で子宮頸部の細胞の形態変化を観察し、適切な処置をおこなえば予防が出来る病気です。また、発症しても早期治療で100%治癒が可能な疾患で、前がん病変の早期診断が鍵です。

HPV-DNA検査で子宮頸がん検診が補強されます

現在行われている、子宮頸部細胞検査では、前がん状態やがんの15%は、見逃す可能性があるといわれています。

HPVDNA検査は、前がん状態を見つけるのに子宮頸部細胞診より感度が高く、ハイリスク型HPV-DNA検査では、特に30歳以上ではより信頼性の高い検査法であることが2006年日本産婦人科学会総会でのシンポジウムで報告されました。米国では既に2000年から30歳以上の婦人科検診で細胞診と同時に行われています。

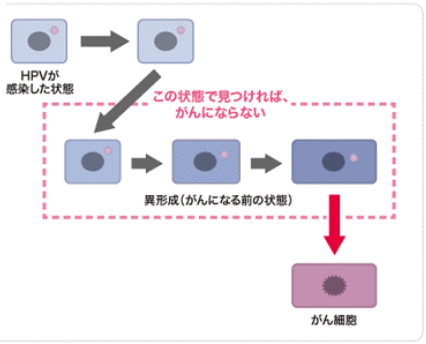
また、米国では30歳以上のHPVDNA検査が陰性であれば、癌であるリスクは1/1000になるといわれています。

そこで、当院は、婦人科検診においてHPV-DNA検査を扱っております。本検査は、ハイリスクグループのうち13種類に関しての感染の有無を調べる検査です。

検査は子宮頸部細胞診と同時に子宮頸部から綿棒で検査材料を採取するので、患者さんの負担と検査時間は今までとほとんど変わりません。より精度の高い検診をめざし、本検査の受診をお勧めいたします。

検査名：HPV-DNA（ハイリスクグループ） 判定：陽性・陰性

注意：結果は、婦人科細胞診とあわせて評価されます



【その他HPVに関して】
①予防：肛門粘膜からの感染があるので100%とはいえませんが、コンドームの使用が一定の効果があると考えられています。
②ワクチンはありますか？：現在ワクチンの開発に成功し、臨床の場でも使用されることになりましたが、これはHPV感染を予防するもので、治療するワクチンはありません。
③陽性といわれたら：HPVはほとんどが正常な免疫力により自然消退するため、治療の必要はありません。ウィルスによって細胞異常（異型細胞、がん）が生じたものに関して治療をおこないます。 感染陽性では、まず定期的に検診を受けて陰性化するかどうか監視することになります。
④ワクチンを接種した場合も検査したほうが良いのですか？：現在行われているHPVワクチンは、子宮頸がんに関係する最も頻度の高い、16,18型の2つのタイプに対する免疫を獲得するものです。頸癌の原因といわれているハイリスクのHPVはこの16,18型を含め15タイプあまりあります。本HPV-DNA検査は、このうち特に頻度の高い13種類を検出するものであり、16,18型以外の管理にも役立ちます。ワクチンを接種された方でも、2～3年に一度の検査が理想的です。